Institute for Studies in Humanities and Cultures, Nagoya City University

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
人間文化研究所

NEWS LETTER

Vol.1, No.4　March 2006

〒467-8501 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑１番地　Tel 052－872-3452　Fax 052－872-3536
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp　HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

『人間文化研究所年報』創刊号が発刊されます！

2005 年 4 月に人間文化研究所が発足して以来、『年報』の発刊は大きな目標でした。その性格づけについては議論がありましたが、1 年間の研究所活動を整理して記録するだけでなく、人間文化研究科教員の幅広い研究分野を反映した読み応えのある「読み物」としての性格をもたせたいというのが、研究所スタッフの最終的な意見でした。そのため、表紙、特集企画、紙面レイアウトまで、「読んでみたい」と思ってもらえる（？）本づくりに努めました。創刊号の特集は「宗教と共生」です。

以下に目次を掲載します。『年報』本体はもうすぐ出来上がりますので、お楽しみに、お待ち下さい。

【目次】

巻頭エッセイ　創刊号の発刊にあたって　村井忠政
特集「宗教と共生」
第 1 部「仏教と共生」
・日本の神仏習合をどう理解するか
－歴史学の視角から　吉田一彦
・仏教思想としての「共生」－その解釈と実践
ランジャナ・ムコパディヤーヤ
・アメリカ日系社会の形成と宗教をめぐって　筒井正
・Xuanzang : from Buddhist Pilgrim to Pop Icon　Paul Tanner
第 2 部「宗教の現代的諸相」
・宗教・人種問題とテロリズム
－2005 年 7 月ロンドン・テロ事件で思うこと　松本佐保
・アメリカ文化戦争の最前線－同性愛問題を中心に
平田雅己
・「テロとの戦い」のかげで
－フィリピンのムスリム問題のいま　赤嶺淳
・ウタキ・ウグヮン・グヮンス－沖縄の信仰生活にみる
阪井芳貴
・動的プロジェクトとしての共生　別所良美
・韓流ブームと日本社会　新井透
・開発と環境とまちづくり　山田明
シンポジウム報告
・多文化共生の条件を考える　成玖美
・越境作家フォーラムの夕べ
いかにして日本語作家となったのか－境界を越える現代日本文学
山本明代
共同研究プロジェクト報告
研究所年間活動

ワークショップ「韓国の保育・幼児教育研究のあゆみと現在に学ぶ」報告

（主催：日本福祉大学COE推進本部、共催：科学研究費「東アジアにおける次世代育成支援政策と地域・国際ネットワーク形成に関する調査研究」グループ、後援：人間文化研究所）

2006年2月11日、人文社会学部206教室を会場として、日本福祉大学21世紀COEプログラムアジア班（チームリーダー勅使千鶴日本福祉大教授）と、私が代表を務める文科省科学研究費グループ（主題「東アジアにおける次世代育成支援政策と地域・国際ネットワーク研究）」）の共催で表記のワークショップを開催した。この開催に際しては人間文化研究所のご後援をいただき、当日村井所長に丁寧なご挨拶を頂いた。ここに深く感謝申し上げる。以下簡単に概要を御報告する。

第一にワークショップの目的は韓国との研究交流の一層の発展にあった。この５年以上にわたり、私たち（丹羽科研グループ）は韓国及び中国に関する子育て支援及び幼児教育改革研究を推進してきた。その一連の流れに即して、今回のワークショップではエリアを韓国に限定し、韓国の幼児教育研究の現状と課題、及び今後の韓国との幼児教育研究ネットワーク展開に向けての課題と方法について研究討議することを目的としていた。

この主題にふさわしいと考えた結果、招聘者は文美玉ソウル女子大学教授となった。先生は昨年５月には韓国幼児教育学会長に就任され、韓国幼児教育のアイデンティティ追求を基盤として日本との研究交流発展に強い意欲をお持ちの先生である事を存じ上げていたからである。

第二に、内容としては、①韓国幼児教育・保育界の現状と当面の課題、②韓国幼児教育・保育研究の歴史と動向、

③韓国幼児教育・保育研究の今後の課題について御報告いただいた。また、ワークショップではムン教授が最近出版された『韓国伝統文化と幼児教育』（良書院、2005）の内容に即して、伝統に依拠する幼児教育の具体的なあり方について、深い討議が行われた。

最後になるが、本ワークショップのささやかな成果の一つとして、ムン教授の前掲書の翻訳出版への取り組みが合意され、実現に向けてあゆみを進めることになった。日・韓の幼児教育界にとって初の歴史的なこの仕事の実現に、精一杯の努力をしたいという思いで今はいっぱいである。

（人間文化研究科教授　丹羽孝）

ユニバーサルデザインフォーラム「使いやすさのひみつ ～ユニバーサルデザインのもの～」報告

（主催：ユニバーサルデザインによるまちづくり研究会、共催：千種区役所、後援：人間文化研究所）

2006 年 3 月 17 日（金）、午後 2 時から 5 時にかけて、名古屋市立大学大学院芸術工学研究科芸術工学棟 M101 教室にて、「ユニバーサルデザインフォーラム　使いやすさのひみつ～ユニバーサルデザインのもの～」が開催された。本フォーラムを主催した「ユニバーサルデザインによるまちづくり研究会」とは、2004 年度の千種区人権尊重のまちづくり事業として実施された一連のワークショップを機に結成された研究会であり、本学人間文化研究科教員（滝村雅人教授、成玟美）と芸術工学研究科教員（鈴木賢一助教授）および両学部学生、エルイー創造研究所、千種区役所区民生活部まちづくり推進室（2004 年度当時はまちづくり推進部地域振興課）による、共同研究グループで

ある。本研究会は、2005 年度には名古屋市立大学特別研究奨励費の交付を受け、ユニバーサルデザインによるまちづくりに関する研究、および子ども向けワークブックの作成をおこなってきた。

本研究会の目的は、その名に示されるように、ユニバーサルデザイン（以下、UD と表記）およびその理念に支えられた「まちづくり」のあり方について研究・発信していくことにある。しかし今回開催したフォーラムは、まずはまちづくり全般ではなく、人間と環境を媒介し、まちづくりの要素となる「もの」に焦点を当てて、先進的メーカー企業における UD のものづくりの現状について知ることを目的として企画された。

ご報告いただいたのは、登壇順に、1）トヨタ自動車株式会社デザイン本部デザイン開発室、奥村忠夫氏、2）株式会社 INAX 営業本部営業管理部営業情報企画室スペースプランニング課、宮崎芳徳氏、3）東陶機器株式会社名古屋支社プレゼンテーション課、中村和世氏、4）コクヨ S&T 株式会社事業戦略部、小西克弥氏の、4 名である。会場には芸術工学部の学生を中心に、千種区住民や他大学学生・研究者を含め、約 60 名の参加をみた。

詳細については割愛するが、各企業とも、人間工学に基づいた独自の UD 指標を開発し、利用者テストなどを経ながら本格的な UD 商品づくりに取り組んでいることが、具体的に報告された。UD によるものづくりの姿勢についても、INAX の宮崎氏は「誰もが使いやすく快適な商品を」と表現したのに対し、東陶機器の中村氏は「いろいろな選択肢を用意して、使う人に選んでもらう」と表現され、UD の考え方にも幅があることを感じさせられた。またトヨタ自動車の奥村氏は、企業内の取り組みだけでなく、企業の取り組みの相互発表の場ともなっている「国際ユニバーサルデザイン会議」についても紹介された。さらにコクヨ S&T の小西氏には多くの UD 商品を持参いただき、参加者が実際に UD 商品を体験できる良い機会となった。

正直に言うと 4 名の報告を聞くまでは、大企業における UD への取り組みは、企業イメージ向上のためのパフォーマンスの側面が大きいのではないかという印象を持っていた。しかし報告を聞き、確かにイメージ向上という結果はあるにしても、それ以上に、すでに UD は消費者の顕在・潜在的ニーズとして、商品づくりにおいて高い優先順位を与えられており、企業内における UD 指標の開発や研究所の設置など、取り組みの真剣度は想像以上であることに、驚かされた。また社会全体の福祉の向上に対しても、企業が担う役割が相当に大きいことを自覚し、その役割を積極的に担っていこうとする姿勢が感じられた。今後、UD を取り巻く状況は、利用者・研究者・自治体・企業の連携体制によってこそ進展していくのだろうと思われた。

尚、各企業からの報告の後、質疑応答に先立って、本研究会で作成中の子ども向け UD ワークブックの内容について、本学学生による報告をおこなった。このワークブックは小学生を対象に、UD について教室や学校の中からまちへと観察の場を広げ、さらにいろいろな人の生活の不便を体験しながら考え、最終的にはユニバーサルな社会のあり方についても考えてもらうという基本構成になっている。学校現場で使いやすいよう、体裁面での工夫も凝らしている。このワークブックの完成と実践については、2006 年度の研究会の活動目標として継続していくことにしている。

（人間文化研究科助教授　成玖美）

リレーエッセイ　人間・地域・共生

第４回「　トリノオリンピック　－　山からの歌声　」佐野　直子（人間文化研究科助教授）

2006年2月10日、トリノオリンピックが開幕した。開幕式をテレビで見た方は多かったかと思うが、その際に「アルプスの文化」としてさまざまな民族衣装の人々が現れたりした場面があったことを覚えている方はいらっしゃるだろうか。私は、その場面で流れた合唱曲を泣きながら聞いた珍しい視聴者である（なのに録画に失敗してしまった。どなたか開幕式を録画していた方、いらっしゃいませんか？）。ほんの一分ほどだったが、アルプスで話される、ある小さなことばの歌が世界中に響き渡った瞬間であった。

トリノオリンピックの会場はトリノ市だけではなく、そこから100kmほど離れた南アルプスの山岳地域にも散在した。その地域は、イタリア語とは異なることばが話される地域でもある。長い間、そのことばは「nosto modo（私たちの話し方）」などと呼ばれ、「山の貧しい人々」のことばとしてさげすまされてきた。このことばが南仏でも話され、中世にはトルバドール（吟遊詩人）がヨーロッパ初の俗語恋愛叙情詩を詠った（このトルバドールの詩はイタリアの誇る文学者ダンテに大きな影響を与えた）ことで有名なオック語であるということが話者たちに知られるようになったのは、1960年代に入ってからである。

現在イタリアのオック語は、1999年に制定された「言語的少数派保護法」によって保護政策が始まったとはいえ、徐々に若者に話されなくなっている（そもそも山に若者がいなくなっている）ことで、消滅の危機に瀕している。この言語を残そうと活動する人々は、トリノオリンピックの際に、さまざまな表示やアナウンスなどにオック語を使用して欲しいと陳情を続けたが、それはかなわなかった。なんとか、開会式の際に、イタリアのオック語地域のみならず南仏でも歌われ、「国歌（オック語は自分の「国」などもっていないのだが）」のようになっている”Se chanta（もし歌うならば）” を一部流すことができたのである。私はここ数年、これらの活動家たちなどを対象にインタビュー調査を行っており、今までの活動の歴史やさまざまな困難についての話を聞いてきていた。開会式での”Se chanta” は、彼ら彼女らの苦労がほんの少し報われたことを意味していた。

トリノは2005年に名古屋市と姉妹都市となった。イタリア随一の自動車企業FIATを擁し、「イタリア」という国家の統一において大きな役割を果たしたピエモンテ王国の首都であった点など、確かにトリノと名古屋には共通点が多い。そして、豊かな文化をもつ「南アルプス」に近隣していながら、その地域に今まであまり目を向けてこなかった点も似ているかもしれない。やはり急速な少子高齢化が進むイタリアにあって、山間部は深刻な過疎化とそれによるコミュニティー崩壊の危機に直面している。トリノの戦後の工業都市としての発展を支えたのは、まず近隣の山間部の人々、次に工業化の遅れたイタリア南部からの人々、そして移民労働者であったのだが。

編集後記　３月末頃、名古屋市の市民意識調査による市施策評価結果が発表されました。それによると、満足度上位には「愛・地球博の推進」や「中部国際空港整備」など、経済的活力に関係する項目が挙がる一方、下位には「援助を必要とする子どもと家庭の自立支援」「合理的な土地利用・多様なまちづくり」「女性の人権尊重」「男女平等参画の総合的推進」などの項目が並んでいます。これら下位項目はまさに、「人間・地域・共生」をキーワードとする人間文化研究所が取り組むべき課題群であるように思われました。

研究所は２年目を迎えます。基盤づくりに追われたこの１年から一歩進み出て、地域社会の課題に応える発信力・提案力のある研究所へと、さらに成長したいものです。（S）

名古屋市立大学
人間文化研究所